

〈方法〉

今回は、内容を分かりやすく伝えるため、使用する調はすべてハ長調（C調）もしくはイ短調（Am調）に統一し例を示します。

- ① 個別活動の場合；提供者は、ピアノもしくはギターでコード伴奏を支えつつ、対象者にはピアノ（キーボード）もしくはザイロホーン（木琴）、メタルホーン（鉄琴）の幹音（白鍵）を「伴奏を聴きながら、合う音探しをしましょう」と提示します。厳密に言えば、幹音でも合わない音もあるのですが、循環コードパターンのなかでは「経過音」という音を発する事になり、全体のリズム性にさえ乗っていれば（ここが重要！）、ほとんどの場合、「演奏」として成立するかと思われれます。また、最初は“合わない感じ”が慣れてくると“合った感じ”になっていくこと（発達支援的要素）も対人援助活動のプロセスでは有効とも考えられます。加えて、最初から“旋律”を意識すると合わないし、あくまでもコード進行の経過に合わせた“音探し（フレーズ探し）”というニュアンスを大切にすれば、徐々に合ってくるかな、と思います（やや禅問答のようですが）。

もう一つのポイントとして、途中で進行のなかに“展開部”を取り入れることも重要でしょう。なぜならその瞬間「おっ場面が変わったな」と状況の変化を対象者が意識しつつも音合わせを続けていけるという具合に状況性・全体性の変化を提示出来るからです。本法はポップスの常套句的コード進行をヒントにしていますから、verse（テーマ）⇒bridge（展開）⇒verse（テーマ）に戻って終り、というのがやりやすいと考えます。もちろん bridge（展開）⇒chorus（いわゆるサビ）という進行もアリですが、対象者とより分かりやすく“音楽”を共有するためには、もう一度 verse に戻る方が親切だと思います。

- ② 集団活動の場合；基本的には個別活動の場合と同じですが、譜例に示すように声による“音支え”をするパートや、打楽器によるリズム活動的参加、複数のメロディ楽器を用いたりして、より合奏的展開も可能と思われれます。

※提供者は、コードイメージをもとに、即席でイメージ旋律を対象者に提供できるようにしておけば、本法をより柔軟に使いこなせるものと思います。